

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2016年11月17日

[テーマ] 群馬を新たな観光ルートに一外国人の宿泊増が肝心―

東京から群馬に移り住んでまだ1年半だが、たまに東京に行った時の疲れ度合いは半端ない。年を取ったせいかもしれないと思ったら、ずっと若い知人も同様の感覚を持っているとのことで、少し安心した。彼によれば、外国人旅行者数の増加が続く中で都心の混雑が日増しに激しくなっているからではないかとのことだった。

確かに訪日観光客は急増を続けている。昨年日本を訪れた外国人旅行者数は1,974万人だったが、今年は2,400万人に達する見込み。「爆買い」の終息から1人当たりの消費額は減少しているが、旅行者数自体は、ビザ発給要件の緩和、LCC（格安航空会社）の就航やクルーズ船の寄港の増加などによるアクセスの向上、そのほか官民の振興策の奏功などを受けて、増勢を続けている。

1億2千万人の人口の国に2,400万人の人が訪れるのだから、既にかかなりの水準であるように思えるが、諸外国と比較すると、まだまだ増加の余地はある。全世界で来訪外国人数が最も多い国はフランスの8,400万人で、米国の7,700万人、スペインの6,800万人と続く。こうした「観光先進国」に仲間入りすることを成長戦略の柱の一つとしている日本政府は、東京五輪・パラリンピックが開かれる2020年時点で4千万人の目標を掲げている。

問題は、東京～富士山・箱根～京都～大阪をめぐる「ゴールデンルート」に訪日観光客が集中している現状である。とりわけ東京都と大阪府への集中は著しい。15年の外国人延べ宿泊者数6,561万人泊のうち、東京都が1,756万人泊、大阪府が897万人泊と、合わせて全体の4割を占めている。宿泊施設の稼働率をみると、東京都が82.6%、大阪府が84.8%であり、いつも使っているビジネスホテルが予約でいっぱいという経験をされた方も少なくないはず。明らかにインフラが追いつかなくなっている。

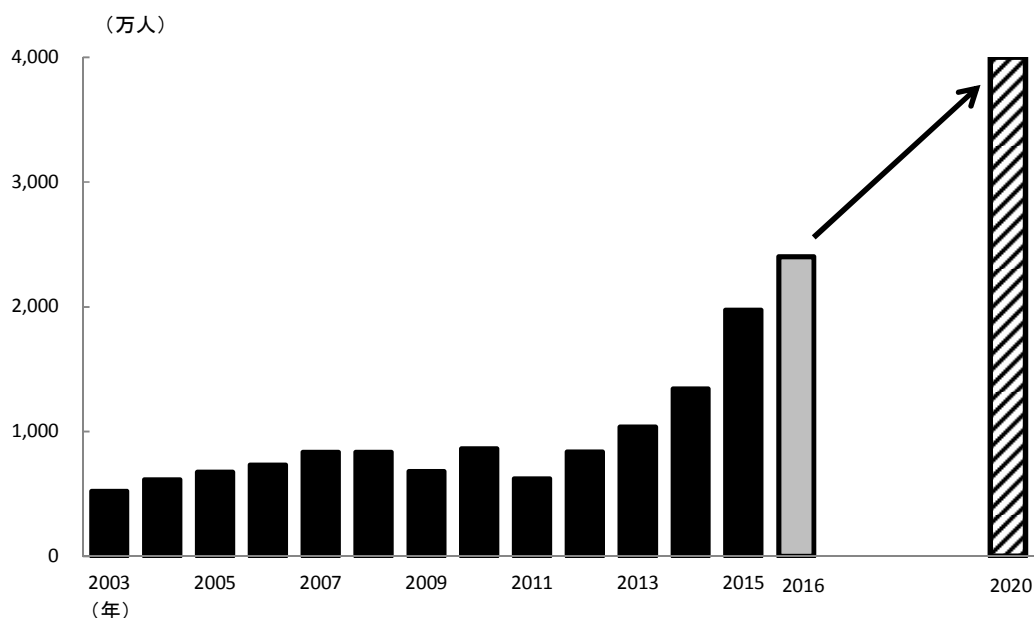
都市部のインフラ不足で訪日観光客の増加の勢いが止まってしまうかということ、そういうことでもないようだ。ここにきて、混雑する東京、大阪などを避けて、地方を訪れる外国人が増えてきているのである。外国人延べ宿泊者数の対前年比をみると、地方部の伸び（59.6%）は三大都市圏の伸び（39.2%）を上回っている。

群馬を訪れる外国人旅行者もしっかり増えている。週末に訪れた上野村では、歩行者専用つり橋「スカイブリッジ」で外国人旅行者のグループが悲鳴を上げていた。もっとも、当地を訪れた外国人旅行者は宿泊せずに他県に移動してしまっているケースが多く、宝川温泉など外国人が殺到している宿はきわめて例外だ。多くの旅館が週末しか利用しない国内客中心の経営を続けている結果、当県の宿泊施設全体の稼働率は50.3%と、全国平均60.3%をかなり下回る。

外国人旅行者に対するアンケート結果をみると、次回日本を訪れた時にしたいことが、「自然・景勝地観光」「温泉入浴」「旅館に宿泊」「日本の酒を飲むこと」「スキー・スノーボード」だったりする。これらは全て当地にそろっている。なんだったら、富士山だってある。最寄り駅の上毛電鉄富士山下駅はGoogleのCMで今や全国的に有名だ。

リピーターの増加に加えて、SNSなどによる口コミの広がり、国内交通網の整備などを背景に、群馬の自然や伝統文化などの体験を志向する外国人旅行者は今後も増加していくのは間違いない。あとはこれに宿泊をしっかりと結びつけることが肝心だ。ゴールデンルートに並ぶ新しいルートが当地を組み込む形で形成されるまで、あと一歩のところまで来ていると考えようではないか。

訪日外国人旅行者数の推移



(注) 2016年は見込み。2020年は政府目標。

(資料) 日本政府観光局 (J N T O) 「訪日外客数の動向」

日本銀行前橋支店長
神山 一成